

全自者協ニュース

JAAS (Japanese Association of Autism Support)

- ・全自者協ニュース／第49号／2017年（平成29年）3月
- ・発行所＝全日本自閉症支援者協会・事務局 ☎ 072-662-8133
- ・発行人＝松上利男・編集人＝五十嵐猛・URL <http://zenjisyakyo.com>

全日本自閉症支援者協会に期待すること

厚生労働省 発達障害対策専門官 日 詰 正文

「派」という字の語源を見ると「一つから分かれた流れ・仲間」とあります。その昔、誰かが始めたことが受け継がれ、引き継がれていく間に、少しずつ違う流れが生まれていきます。例えば、習い事の多く、茶道や華道、武道、また、宗教や芸術、政治、学問などにも「流派」があります。このような様々な分野の歴史と同様に、自閉症支援においても様々な現場で先輩が積み上げ育ててきた知識や技術の「流派」があります。それぞれの流派の個性は、歴史の中で生き抜いて磨かれていきます。しかし、時々立ち止まって、分かれる前の「一つ」の源流は何だったのか振り返り、思い出すことが必要になります。自閉症支援にとってこの源流は、当事者の安心・安全・幸せです。

全日本自閉症支援者協会が近年取り組んでいる発達障害SV養成研修は、たぶん、この源流を再認識するための取り組みなのだと私は感じています。他の施設に実習に赴くこと（さながら他流試合のような）は、訪れた実習生と引き受けた担当者の「勝った⇔負けた」の勝負ではありません。お互いの施設の風通しを良くし、自分の施設のことだけでなく他の自閉症支援に取り組んでいる仲間のことを考え、お互いが学び合い、当事者のために支援の質を高めることにつながります。幕末に生きた坂本龍馬は、この他流試合を数多くこなし、ことごとく勝利したようですが、剣士として偉ぶることなく、立場の違う人のつなぎ手として

剣の力を生かしたそうです。「全日本」というこの協会の冠にも、坂本龍馬のような視野の広いセンスを感じます。

さて、ここ数年、障害福祉のサービス事業所数は急激に増加し、自閉症支援のための「流派」は、もはや把握しきれないくらいに（小川が大河になったように）なっています。途方に暮れている方も多いかもかもしれません。しかし（瀬戸内大橋や青函トンネルの開通のように）それを乗り越えることができる日はいつか来るものと思います。そのために、全日本自閉症支援者協会の皆さんが仲間同士で切磋琢磨しつつ信頼感を深めていただき、少しずつその周辺にいる自閉症の支援者を名乗る人を味方にしてください。また、そのために説得力のある実践（きちんとしたアセスメント技術の習得と、直感や経験のみに依存しない支援）を高めてください。厚生労働省の行う研修も、同じ方向を見ながら取り組んでいきたいと思っています。

最後をお願いを2つ。「自閉症」を伴うことも多い他の発達障害のタイプについても、関心を向けてください。また、障害福祉の分野、例えば子育て支援や若者支援、介護、警察など様々な分野の方も現場で自閉症の支援に悩んでいますので、「全日本」の看板を背負った協会の一員として皆さんからサポートに踏み出してください。よろしくお願ひします。

全日本自閉症支援者協会函館大会

社会福祉法人侑愛会 星が丘寮
中野 伊知郎

平成28年11月10日(木)、11日(金)の両日、北海道函館市にある「フォーポイント・バイ・シェアトン函館」を会場に「第30回全日本自閉症支援者協会函館大会」が開催されました。

全日本自閉症支援者協会の前身である、全国自閉症者施設協議会は、自閉症者の人権と生きるための発達保障、自立並びに社会参加のために実践と研究を推進し、これに参画するものの研鑽と相互交流を目的として昭和62年(1987年)に発足しました。発足以来、毎年研究大会を開催しており、今回で30回という節目を迎えることとなりました。そのような大会に全国各地から270名を超える多くの参加者が集い、今回の大会テーマである「自閉症の方々の合理的配慮を考える」に則ったプログラムに基づいて、熱気のある議論が交わされた2日間になりました。

一日目は開会宣言、行政・関係団体などの来賓の方々のご挨拶の後、歴代の功労者である、武村一郎氏、



り熊本震災のお話しいただきました。自然災害の恐ろしさと、日頃からの備えについて深く考えさせられる内容でした。

基調講演では、京都市児童福祉センター 副センター長 門 眞一郎先生をお招きし、「自閉症の方々へのコミュニケーション支援」と題して、お話をいただきました。自発的なコミュニケーションを育てることが、自閉症の方に対する合理的配慮として重要だということを大変わかりやすくお話をいただき、支援のヒントになるノウハウをご紹介いただきました。

二日目は、当会 会長 松上利男氏の司会進行により、本大会のテーマでもある「自閉症の方々の合理的配慮」についてシンポジウムを行いました。自閉症の合理的配慮について、就労・地域支援・人材育成という観点から星明聡志氏、加藤潔氏、五十嵐康郎氏のお三方よりお話をいただき、より深く自閉症の方々の合理的配慮について議論が進められ、フロアーとの意見交換などが行われました。

その後、閉会式が執り行われ、午後からは、4つの分科会に分かれ、テーマごとに議論が交わされました。

*第1分科会「強度行動障害の適切



な支援」〜根拠ある支援とチームアプローチの支援の実際を通じて、強度行動障がいのある方への合理的配慮について考える〜の内容に沿って、北海道「ねお・はろう」上川氏、東京都「昭島生活実習所」伊藤氏の発題の後、助言者の田熊氏よりコメントをいただき、フロアーとのディスカッションが進められました。

*第2分科会「自閉症の方々の地域生活」〜グループホームでの実践報告を基に、一人ひとりの利用者にとって必要なサポートは何か、地域の中で豊かに暮らしていくための合理的

分科会	テーマ
第1分科会	「強度行動障害の適切な支援」 ～根拠ある支援とチームアプローチの支援の実際を通じて、強度行動障がいのある方への合理的配慮について考える～
第2分科会	「自閉症の方々の地域生活」 ～グループホームでの実践報告を基に、一人ひとりの利用者にとって必要なサポートは何か、地域の中考で豊かに暮らしていくための合理的配慮について考える～
第3分科会	「自閉症の方々の日中活動」 ～様々な日中活動における実践を報告していただき、その中で、どのような合理的配慮がなされているのかについて確認し考える～
第4分科会	「児童期の支援」 ～成人期に大きく影響を与えるであろう、児童期にスポットを当てることにより、成人期に向けて必要な支援と合理的配慮について考える～

配慮について考えるの内容に沿って、札幌市「共同生活援助やすらぎ」道塚氏、横浜市「横浜やまびこの里」斎藤氏の発題の後、助言者の光増氏よりコメントをいただき、フロアーとのディスカッションが進められました。

*第3分科会「自閉症の方々の日中活動」～様々な日中活動における実践を報告していただき、その中で、どのような合理的配慮がなされているのかについて確認し考えるの内容に沿って、埼玉県「やまびこ製作所」

宇藤氏、千葉県「袖ヶ浦ひかりの学園」松田氏の発題の後、助言者の後藤氏よりコメントをいただき、フロアーとのディスカッションが進められました。

*第4分科会「児童期の支援」～成人期に大きく影響を与えるであろう、児童期にスポットを当てることにより、成人期に向けて必要な支援と合理的配慮について考えるの内容に沿って、大分県「豊後大野子育て総合支援センター」五十嵐氏、北海道「つくしんぼ学級」山本氏の発題の後、

助言者の日詰氏よりコメントをいただき、フロアーとのディスカッションが進められました。

ご後援を頂きました北海道、函館市をはじめ、多くの団体・関係者の皆様方に、この場をかりて、改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

次回、平成29年度大会は、新潟県新潟市にて開催される予定です。

発達障害支援スーパードバイザー養成研修 実務者意見交換会が開催されました。

さる平成28年11月10日、函館大会に先立ち、フォーポイントバイシエラトン函館にて、実務者意見交換会が開催されました。

日本財団の助成を受け、当全自者協が実施して3年目となるSV養成研修ですが、この度、この研修の特色でもあり、大きな要となっている実務研修の受け入れ施設の担当者が集まり、初の意見交換が行われました。各施設からの現状や課題、また会長をはじめ実行委員の方々からの話しもあり、今後の研修の参考になる貴重な話し合いがなされましたのでご紹介いたします。※全てを掲載したいのですが、紙面数の関係上、要旨の抜粋となりますのでご了承下さい。

【意見交換】

● 侑愛会 星が丘寮 中野伊知郎氏

・侑愛会では、ライフステージで、幼児期から成人期、高齢に至るまでの支援が一貫してあるということ、うちで伝えられる強みはそこにあるのではないかと。昭和63年位から実践している、ティーチプログラムの構

造化。自閉症の方々への支援の一貫性を法人全体で担保するということが進めてきたことを伝えられるのではないかと。

・4日間のプログラムの中で、ライフステージの実践を、表面しか見ていただけなかった。もう少し、焦点をあてて、じっくり利用者向き合える中で、アセスメントに時間をかけて伝えた方が良かったのではないかと思った。

・幼児期は幼児期の大切さ、成人は成人のQOLをどう高めていくのかという主眼の持ち方など、なかなか深いところまで伝えることができなかった。

・構造化についても表面的なカードを使うということではなく、そこに至るまでのプロセスを実感として持ち帰っていただけるような仕組みにしていかなければならないのではないかとという話があった。

・もっとブラッシュアップをして、もう少し、我々の法人も伝えられる内容のポイントを絞っていかなければならないと思った。

●はるにれの里 厚田はまなす園

中村修一氏

・発達障害者支援ということ、どこにターゲットをあてるかということ、とで、悩んだ。

・入所施設で実習をすることは大切だが、どんな考え、思いで支援をしていくかということが、知的のあるなしを含めて、同じように共通するテーマになると考え、実習を組んだ。

・結果、アンケートにもあったが、ほとんどが見学という中身になった。4日間のプログラムをつくったが、1日目の午前中だけが施設の中を見るということ、あとはいろいろな事業分野の見学という中身になった。見学をした後に、講義を併せて行った。

法人がどんな風に考えて、支援を行っているか、それを知ってもらったことが一番大切かなと思ったこと、法人として努力しているところもみていただきたいなと思っていた。研修の中で、地域支援に直接関わっている職員が学び合う法人内研修に参加する場を必ず設定し、グループワークに加わっていただき、法人が努力している部分も見てもらいたいと思った。同じく、法人が苦勞しているところも隠さず伝え、参加した方々がフィードバックをもらうということ

とも多々あった。

●梅の里 あいの家 松本宏氏

・研修に来ていただくことで、当法人にとって多くの学びや気づきがあった。

・研修生の姿勢や質問等を目の当たりにすると、私たちの日々の支援の振り返りにもなって、貴重な機会を持てたと思う。

・研修生との意見交換では、職場間の垣根を越えたやりとりがあり、お互いに学びあいを実感することがあった。同じ課題や悩みを抱える者同士、短時間ではあっても仲間意識が生まれたと思う。

・現場の職員においても、自ら進んで勉強しようという姿が見られ、人材育成への大きな効果につながったと思う。

・研修に来られる方は、実務経験の長い方も多く、日々現場で熱意を持って真剣に取り組んでいる方達で、高い支援レベルに見合った対応を求められるため、常に法人全体で共通した意識をもって、支援を維持していくことが難しいなと感じている。

・フォロアップの研修等が設けられると更に充実すると思う。

●菜の花会 しもふさ学園

館山聡氏

・実際に自分の法人ではこういう考

えて支援をしているということ、

いかに伝えられるかというところで、

プログラムを組んでいる。

・丸1日は現場に入って実習をする。現場の職員にも良い刺激になるかなと思う。

・疑問に思った点が、経験年数の差がある職員がいて、3年目や5年目の職員の方や大ベテランの20数年の方が一緒に研修を受けるとい

ると話の内容をどちらにあわせるのかということもあり、難しいところがあった。

・研修を通して、ネットワークが広がるということが有意義な良い点にあげている。

・グループワークをしてSVを学ぶという部分において、各施設、法人の職員においては困難な利用者の事例を出していただいて、それについていかに強みに変えていくかというところをグループワークして、それを現場に持ってかえっていただくという取り組みをした。

・大体こういう研修を受け入れると、実際に良いところを言っていただけだが、ぜひ悪いところの指摘もいただければと思っている。

●嬉泉 袖ヶ浦のびる学園

柳淳一氏

・萌葱の郷のプログラムを参考にさ

せてもらった。

・初年度、受講生の中から、もう少し現場を見たいという意見があり、次年度は、成人、児童、どちらの学園にするか希望を取って、実習をしていただいた。

・講義を入れて、臨床実習を入れて、臨床実習の後に、実習生と意見交換をした。

・思いもよらぬ副産物もあり、児童施設は成人施設へ移行するということがあり、受講された方の中から、卒業後の移行先として申し出があり、良い出会いをさせていただいた。

・当法人からも何名かSV養成研修に出ており、その内容を聞くと、臨床実習よりも見学研修が多かったということ、もう少し現場で研修をしたかったという意見が聞かれた。

●袖ヶ浦ひかりの学園 霧生弘長氏

・自分たちの理念を改めて見直す良い機会になった。逆にこちら側の研修になったという声があった。

・反省、改善点のところで、「研修内容に関するフォローアップ、最低限受ける講義の時間、および現場での実務研修の時間を指定する等ある程度定まっていた方が分かりやすかった」というような意見があった。

・私どもの法人の支援の主軸としてある受容的交流理論について、理論

的に講義や座学だけでは伝えられない部分が大きいと感じていて、日数的なものを長くもらってじっくりと臨床実習の方で感じてもらいたい、伝えていきたいという思いが非常に強くある。

●横濱やまびこの里 東やまたレジ
デンス 木村重之氏

・研修の構成は、講義演習と現場見学実習、事例検討の三つの柱で行った。

・単独職員による支援ではなく、利用者チームで支援していく仕組み、重要性を伝えた。

・講義演習では、初めに構造化された支援を提供する理由や意味を理解してもらう為に、基本的な支援の考え方や観察評価を講義として設定。問題行動・行動障害の支援の講義では、利用者が行動障害を起こす人ではなく、環境との相互関係の中で生じている行動の仮説を、障害特性と関連づけて説明をしている。分かりやすく環境を変えられることで、そうした行動が改善できる可能性を説明している。

・講義、演習と現場見学実習では、作業エリアでの個別化された支援の工夫やチームが同じ考え方や関りによる支援を実施している仕組みを現場の見学や実際に支援の補助として

参加してもらい実感してもらった。

・ティーチや構造化の実際を学びたいという声が聞こえていたが、方法論や技能習得より、一人ひとりの自閉症の人達を理解するポイントと、チームによる支援の進め方に研修の力点をかけた。

・今後のフォローアップの研修がとられていけばさらに良くなると思う。

●正夢の会 昭島生活実習所

伊藤洋介氏

・初年度からある程度ひな形をもった形で、受け入れを行っている。

・基本的には現場実習が多いが、そこに講義を盛り込んでいる。

・かなり事業数が多くなってきたので、ある程度焦点を絞ってSVの方に学んでいただくということ、施設入所支援、生活介護、児童の3点に絞って受け入れを行った。

・各種マニュアルや、フォーメーション表というスタッフの動きを定めたものを作っていて、利用者支援が滞らないように、一定のサービスができるような工夫を行なっている。リスクマネジメントとして、ヒヤリハット

トだけではなく、ニヤリハットの取り組みということ、利用者様の良いところを見つけたら視点をもっていいところというところをアンケートでも評価されていると思う。

・アセスメントの重要性というところで、当法人の心理士の講義も行っている。

・全国の施設職員の方とのネットワークが広がるということと他の施設をみられるところ。当施設の人材育成の面でも良かったと感じている。

●めひの野園 うさか寮 東真盛氏

・私達の法人では、まずは私たちのささやかな実践の全てを見ていただいで、何かを感じていただき、共に学べればと受け入れていた。

・特性に合わせた環境設定、出来ること、得意なことを活かした日中活動、法人全体で取り組んでいる委員会活動、地域との連携・地域生活支援について実習や講義を行った。

・現在の様子を見ていただくのも一つ大事なことだと思うが、ここに至るまでのプロセスをどの程度紹介させていたただいているのかは疑問に思っている。SVの仕事はそのプロセスをしっかりと積んでいくことだとすると、もう少し事例検討などに力を入れていくべきなのではないかと考えている。

・研修で必要とされる力点を、ポイントとしておさえていく必要があると思う。「こういうことは学べましたか」など、アンケート等で受け入れ施設間で力点を共有できると良と思

う。

・3年間受けてきて、現場で嬉しい変化があり、外部の目を入れることで、職員の意識がずいぶん変わってきたと感じている。

●檜の里 あさけ学園

近藤裕彦氏

・1日目は、研修生同士の自己紹介とそれぞれ自分の部署でどういう役割をもってここにやることになったのか、或いはその施設や現場の紹介から始め、オリエンテーション、施設全体の見学をしてもらい、翌日から現場に入ってもらい日中活動について説明。2日目から4日目は、朝の引継ぎから夕方まで、朝、夕の生活時間や日中活動に入ってもらい、振り返りの討議を夕方に行う。5日目は実習全般を通じての討議の後、それに合わせて講義を一つ行う。

・受け入れの効果は、当施設の支援者が支援行動を相手に理解できるよいう説明しようとするので、それぞれが客観的な振り返りの機会ができた。そして、外部の様々な現場の様子を聞いたたり、様子を知ることができた。3番目に、虐待、行き過ぎた支援の防止に向けての第三者評価の一助となった。4番目として、今後の仕事上のメリハリ、研修の意欲向上になった。

- ・課題として、取り組みの内容を見てもらって理解したとしても、各自の現場にどう活用していくかまでは至っていない。
- ・現場実習が日中活動中心で、早朝、或いは夜間の生活支援のプログラムが研修に提供できていないことが課題として残る。

●北摂杉の子会 ジョブサイトよど

田端たまみ氏

- ・初日に法人全体の概要と支援の在り方について説明をした後、意見交換。二日目からは、生活から日中活動までということ、最初に行動障害の方のGHの見学、入所施設の見学および、行動障害の支援ということとで講義を行っている。その後、ケース会議。二日目の夜に懇親会を行い、若手の職員などと意見交換会。三日目は、就労移行支援事業所のジョブジョイント大阪で臨床実習。その後、ジョブサイトよど就労継続B型生活介護事業所での臨床実習。夕方うちの研修の人材育成研修室の講師による、自閉症者の就労支援を、ら見た研修。自閉症者の就労支援を、回によってやっている。最後の日に、こどもの療育センターで臨床実習をしている。
- ・課題として、もっと法人全体ですトリーのある研修企画が必要かと

感じている。

- ・SV実務研修の最低限盛り込むこと、アウトラインみたいなのがあれば企画しやすいと思う。法人によって格差があるのではなく、一律に実習に受け入れたら良いと思う。
- ・最初に実習先の法人を選ぶ際に、なかなか実施要綱だけでは内容が分かり難く、選択するのに困ったという話があった。

●あかりの家 尾崎勇一氏

- ・全自者協の事業ということで、法人全体で成功させていこうという思いを強くもって取り組んでいる。
- ・受け入れにあたって、自分たちが学ぶ機会だと、職員が強く意識している。
- ・できるだけ客観的な支援を、言葉にしていけるようにしている。
- ・講義だけでは難しい利用者の支援を、最初に三原園長からしっかりと説明してもらった後に、臨床実習という形で現場に入ってもらおう。その後「リハビリ的ショートステイ」の事例検討をして、流れをもつて説明してもらおうことで、受講者の方にも言葉だけではなく、現場を見て、取り組みや流れを知ってもらい、分かりやすく理解してもらえられていると思う。

- ・研修担当が入らない形で、受講生

だけの時間、フリートークを4日目の最後に設定している。

- ・受講生が多種多様になってきている。相談支援や会社関係の人が増え、一般的な福祉、あかりの家でやっている入所支援や通所支援ではないところでの意見も多数でてきているので、そこに対する支援が弱くなっているなどと思う。
- ・日中だけではなく、早朝や夜間を見学したいという意見もあるが、なかなか時間がとれず課題となっている。

●三気の会 三気の里 佐藤和也氏

- ・自閉症、発達障害、全自者協、社会に貢献していこうという目的をもつて受け入れを図った。
- ・施設の透明化を図る。受講者という第三者の目を通して、自分たちの支援を見直す。情報を整理して、説明する術を学んで、説明責任を果たすということを受け入れの意義として行った。

- ・研修プログラムは、萌葱の郷の研修プログラムを参考にした。
- ・事業所の事業説明、現場での臨床実習、力を入れている動作法の実技講習、強度行動障害の取り組み。事例検討会。今年度は震災があったので、今年度は震災の事例報告。受講生との情報交換。

・受講者の立場の受講希望の動機によって、研修プログラムは変えないといけないと考えている。

- ・三気の里は開所からの創始者の思いを基に、運営、理念、療育をやっている。その経緯を説明している。三気の里は特別な療育を利用者に当てはめるのではなく、利用者に応じた支援をしていこうということをやっている。
- ・受講生の方から学ばせてもらっていることが多い。
- ・実習の実施側も、ベテラン職員だけではなく、若手、3年目、中堅に研修実施してもらい、こちら側のレベルアップをさせてもらっている。

- 萌葱の郷 五十嵐猛氏
- ・初日に法人の理念について理事長から話があり、2日目から4日目臨床実習。自閉症総合援助センター、発達障害者支援センター、各施設、児童発達支援センター、認定こども園等を含めて見学をしてもらっている。最終日に、大分県の発達障害者支援者養成研修について説明をしている。

●めぶき園 野上悦男氏

- ・現場を見たいという意見が多いので、丸一日と半日午前中、現場に入ってもらっている。
- ・現場の方は結構大変だが、実際に

・現場の方は結構大変だが、実際に

受け入れてみてやはりそれなりの人が研修を受けられ、中を見られるということ、職員にとってよい刺激になり、人材育成になっている。

・実習に来る人の職種や児童、臨床など、それぞれの立場の人が来るので、そこを絞って受け入れるようにできればよい研修ができるのではないかと受け入れ側として感じている。

●なかよしひろば 新宮貴志氏

・4日目の研修は1日を通して、幼児から学童児までの主にこども達を対象に支援をしている現場を見てもらっている。

・午前中の児童発達支援センターは、子育て総合支援センターとして同一敷地内に、児童発達支援センター、認定こども園、子育て支援センターの三つが一体的に運営されている。そのことからくるメリットや成り立ちの説明をして、早期療育の必要性や対人関係を中心に、大切さを伝えられている。

・午前の児童発達支援センターに入る時間が少なくなってしまうという課題が見つかったので、今後時間を調整して現場に入る時間等を少しずつ長くしていけたらと思う。

・受け入れたことの効果として、他のところの職員が来て、実際の現場を見ていただくことが、現場で働く

職員のスキル向上につながっている。また第三者の目から見てもいい、色々な意見をいただくことで、職員の質の向上や虐待の防止など様々なメリットが効果として挙がっている。

【三原憲二副会長】

・13法人、様々な角度から意見をもらうことができた。

・様々な課題を抱えながらも、受講生の高い評価の下で、どの法人も実施している印象を受けた。

・受講者には、管理者系の人も多く、経験年数も様々、支援関係者だけではなく、相談関係者多く、学校の先生もあって、幅がある。受講者が1回目と変わり始めたという議論もあった。

・SV研修は集合での座学、実務、当事者支援の三つに分かれているが、本格、本物が売り物のような気がしている。全自者協の施設での実務研修がその本物の中に含まれている点は再確認したい。

・実務研修のカリキュラムであるが、多くは萌葱の郷のものをモデルにしている。「実務研修」というものも、法人によって、座学、グループワーク、実習とかなり幅がある。見学的なものから体験的、臨床的など、色々な言葉でも表現されている。「実務」というものをこれからどういう風に考

えていくのか、これからの大きいテーマになる。

・五十嵐副会長が、受け入れ法人に「法人全体の底上げになる」というメリットを言葉にされていたが、現場の良い刺激になっている、受講生から学ばせてもらっている、職員の目の色が変わったということなど、多くの法人が取り上げている。ネットワークづくりなどの成果も挙がっていた。

・受け入れ法人の基準をどうするかという、これからの課題がある。どういう基準で受け入れ法人を選定するか、プログラムも各法人の任意のプログラムという印象が強いがこれをどうするか、避けられない課題である。

・SV養成研修は日本財団から助成を受けていたが、3年目が終わり、今、4年目の申請をしているところ。もし日本財団で助成が受けられない場合に、どうしていくか。厚労省の実務研修に関する指定研究を、全自者協を代表して嬉泉で行っているが、我々のSV実務研修が高い評価の下で、相当の成果をあげているという事実はしっかり反映させたい。

【実行委員から】

●はるにれの里 木村昭一氏

・今日、話を聞いて感銘を受けた。

SV研修が素晴らしい成果をあげていることをつくづく感じた。

・共通しているのは、参加した研修生も受け入れた事業所も学びあっている。なおかつ自閉症施設法人は、どこもユニークなスタートの仕方をしていく。どこも支援スピリッツ、こだわりのスキームを持っているのが現状。それがSV研修を通して標準化を目指していることを実感した。

・SV研修は参加者の成長を促すものにはあるが、派遣した側、受け入れた側、事業所として組織として大きな成長を促されているなど実感している。

・今後、厚労省の制度研修にもっていきたいのが願い。国に対して、私たちの研修の意義を認めさせられるかが、最終的な焦点となるであろう。ただし現時点での成果をしっかりと厚労省に伝えていく必要があると感じた。

●檜の里 近藤裕彦氏

・最初、このSV養成研修を始める時に、たぶん周囲の目としては、全自者協の管理者を養成するための研修を申請しているのだろうと思われるのではないかと私は思う。

・実際に進めていただいている中で、全自者協の施設よりもそれ以外の事業所の人の参加が多くなってきたこ

とがまさに世間から認められた実務研修と思っている。

・皆さんの話にもあるように、これから次にどう繋いでいくかというところについて、さらに検討していかなければならないと思った。

●石井啓副会長

この実務研修ということで、皆さんの素晴らしい熱気を感じることができたのは、今日の大きな成果だと思います。

・今後を考えていかなければならないが、一つはこの研修が、全自者協として何が売りなのかというものの強みは何かということで、それは現場力だと思う。もちろん入所に限らないが、ある意味集約した形で利用者支援をしているという現場の力を生かした研修を、どう組み立てるのかだと思う。もちろん理念的なこととは、当然バックボーンとして必要だが、現場にどう研修を取り組むか、共通して考えていかなければならないと思う。

・どういった人材を養成するかということ、もう少しスーパービジョンということに特化した形のプログラムも考えていかなければいけないと思う。

【総括 五十嵐康郎副会長】

・皆さんの話を伺って、SV研修を

実施して大変良かったなとまずは思う。

・「SV養成研修になっているのだろうか？」という疑問を持たれた方がいたと思うが、私はSVというのは、一片の講義や研修で培われるものではないと思っている。本当に幅広い、専門的な知識と質の高い実務経験を重ねることによって、本当の意味でSVとなりうる。SV研修と名乗っているが、これが終わってSVということにはならないと思う。

・研修プログラムの内容、受講生の幅の広さとニーズの問題が様々でいたが、私の私見で申し上げると、一定程度、色々な具体的なことをしているそれぞれの法人で、研修プログラムを参考にしつつ、標準化する必要はあると思うが、ただこれについては、受け入れ法人の特色や、やっている事業の内容も違うので、それぞれの特色はあってよいと思う。研修受講する際に、どこを希望するかということ、迷ったという意見もあったので、今後、法人の特色として、ここで何が学べるのかを、受講する方に分かるようにするとよいと思う。

・受講生の幅が広いということだが、ここ十数年大分県で色々な研修に取り組んでいるが、私どもの法人では、

医療機関、保育、教育機関、労働機関、行政など、非常に多様な、経験年数も多様な方が受講されている。そこで私たちが伝えているのは、基本理念と、実際にやっていることを見ていただく。そしてこういう思いでやっているということ、こちらがやっていることを、きちんと言念も含めて実践を伝えていくということ。実際には、受講生をある程度そろえるということは現実的に難しい。

・受け入れ人数の問題は、うちは6人を受け入れている。一定程度の人数を受け入れることで、受講者同士のコミュニケーション、連携、関係が育つということ、ある程度の人数がいたほうが、受講生も色々な面で参考になると思う。受入側も学ぶ点の多いのではないかと思う。

・受講期間は、4日ないし5日。すべての事業をきちんと満足できるところまで伝えるのは不可能だが、派遣する側の負担も考えると、1週間くらいが限度だろう。

・今日、限られた時間の中で、皆さんが論議するところまでいたらなかった。次年度以降、研修大会において、例えば分科会で「SV養成研修の在り方について」「実務研修にあり方について」などの分科会を設け

て、もう少し時間をもって討議を深めていくということに取り組んでいけばよいのではないか。

【松上利男会長】

・貴重なご意見をいただき、一回目ということなので、来年は人材育成、SVについての分科会で大いに議論するのは私も大賛成。それを通じて、さらに磨き上げていけると良いと思う。

・厚労省で、どういう仕組みをつくるのかというのはあるが、実際にSVを養成するときに、実務研修は必要だし、それをベースにしたフォローアップ研修の仕組みをつくるのが私たちの課題。現在の日本の中で、どこが受け入れられるかということになると、全自者協が中心にならざるを得ない。これは現状としてある。私どもの私たちの実務研修の在り方をもっと議論して、もっと磨いていくことが協会員としての大きな役割だと思っている。今日は本当に貴重な意見、ありがとうございます。

平成 28 年度 厚生労働省との懇談会報告

<日 時> 平成 29 年 1 月 17 日 (火) 10:00 ~ 11:30

<場 所> 厚生労働省

<出席者>

厚生労働省 日詰正文専門官、曾根直樹専門官

全日本自閉症支援者協会

会 長 松上 利男 (北摂杉の子会)

副 会 長 五十嵐 康郎 (萌葱の郷)、三原 憲二 (あかりの家)、石井 啓 (嬉泉)、

常任理事 木村 昭一 (はるにれの里)、近藤 裕彦 (檜の里)

理 事 中野 伊知郎 (侑愛会)、後藤 博行 (横須賀たんぼぼの郷)、松本 正 (ひらきの里)

事 務 局 佐々木 寛昭 (北摂杉の子会)

広 報 五十嵐 猛 (萌葱の郷)

会長より新たに職能団体として活動することを目指して名称変更をしたことと、社団法人化に向けて手続き中であることの報告を始め、以下の4点についての意見交換と要望を行った。

①発達障害支援スーパーバイザー養成研修の協働化に向けて

発達障害支援スーパーバイザーの実績に基づいた試案を手掛かりに、厚生労働省との協働化に向けて意見交換を行った。今後の課題として、本養成研修を制度に組み込む上での位置づけとしてスキルアップの材料とするのか、研修修了後の加算としていくのか、といったことの議論を深めていく必要があることを確認した。厚生労働省側からの意見として、来年度は本年度の調査研修をもとにしながら、発達障害者支援センターの職員や発達障害支援マネージャーに対して本養成研修の情報を提供し、協働化に向けての具体的な計画をすすめていく提案をいただいた。

②重度障害者支援加算について

当協会の会員施設は対象となる利用者が多いことから、夜間支援もあることを踏まえると30年度までに要件を満たすことが困難である施設もあるため、強度行動障害支援者養成研修についての調査情報の提供とともに期間延長についても検討していただくことをお願いした。

③児童発達支援の重度障害者への居宅訪問療育について

自閉症は家庭での行動障害が激しい場合も多いことから、本制度を活用しながら家庭療育もすすめられるように整理し、都道府県にもアナウンスしていただくことをお願いした。

④福祉施策への関与について

当協会が社団法人としての認可を受けたことから、国の福祉計画や施策等の運営委員会にも自閉症支援者を代表する団体として参画できるような配慮をお願いした。



発達障害支援スーパーバイザーの会(全日本自閉症支援者協会後援) スキルアップ研修会の報告

平成 28 年 12 月 23 日(金)、大分県大分市にあるホルトホール大分にて「発達障害支援スーパーバイザーの会 スキルアップ研修会」を開催しました。約 300 人の参加者があり、「支援者のスタンスについて考える」というテーマのもと、様々な実践を通じて自分の視野を広げることの重要性について再認識したという感想をいただくことができました。

基調講演では、前フェイエットビル TEACCH センター長 スティーブ・クルーパ氏より、自閉症スペクトラム支援における統合的アプローチとして、一見、相反するように見える技術ベースのアプローチ(テクノロジー)と関係性ベースのアプローチ(アート)を両輪にしながら、支援者の資質を高めることが効果的であるとお話いただき、受講者からは、これまで TEACCH プログラムを狭く解釈していたことへの反省意見等が出され、正しく理解できる機会になったとの感想をいただいています。



その後の情報提供者からは、厚生労働省発達障害対策専門官日詰正文氏より、発達障害者支援法の改正にもとづいて、より重層的な支援の推進を目指した施策についてご紹介いただき、その中でも、特に発達障害者支援センターの地域支援機能強化として発達障害者地域支援マネージャーの配置と活躍している実践については、受講者からも今後の期待が多く寄せられていました。次に、熊本大学特任助教である田中恭子氏からイギリスにおける障害者の医療支援について、知的障害専門看護師がコンサルテーション活動をしていることや保護者の運動により自閉症学校が設立・運営されていること、知的障害のある人の診察に対して診療報酬の加算があるなど、障害のある人が医療を利用しやすい工夫、仕組がすすんでいることのご紹介をいただき、自分達ができることから始めることの重要性につて、認識を深めたとの感想を多くいただいています。

シンポジウムでは、全日本自閉症支援者協会松上利夫会長が進行役となり、スーパーバイザー養成研修事務局をされている五十嵐康郎副会長、大分県スーパーバイザー養成研修委員長である釘宮誠司氏、日詰正文専門官が指定討論者となり、全日本自閉症支援者協会がはたす役割について議論を深めました。職能集団として研修会や情報発信を行うとともに、制度・政策への提言をすすめていくことや、平成 26 年からスタート

しているスーパーバイザー養成研修を発展させていくことにより、自閉症スペクトラムの人たちの人権と発達の保障、福祉の増進及び社会参加の促進を図り、広く社会に貢献していただくことが役割であることを確認するとともに、支援者のスタンスとしては、広い視野を有しながらサイエンスとアートの他、ハートを持ち続けていくことも重要であることについても確認し合うことができました。



発達障害支援スーパーバイザー活動報告

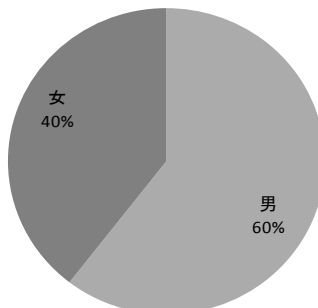
発達障害支援スーパーバイザー養成研修修了者 86 名（平成 27 年 12 月現在）に向けて、現在の活動状況について調査を行いました（平成 26 年度 52 名、平成 27 年度 32 名）。

①都道府県別

北海道	5
茨城	11
岩手	1
埼玉	4
千葉	7
東京	2
神奈川	6
富山	2
石川	1
福井	1
長野	2
静岡	1
三重	3
岐阜	1
京都	3
大阪	2
兵庫	10
広島	1
山口	2
香川	1
徳島	1
福岡	4
長崎	2
熊本	1
大分	7
鹿児島	5
合計	86

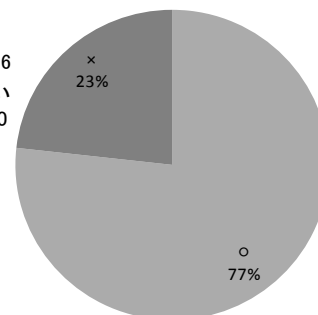
②性別

男 52
 女 34
 計 86



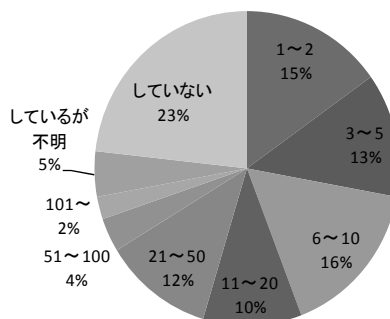
③スーパーバイズ & コンサルテーションしているか？

○している 66
 ×していない 20
 計 86



④トータル回数

1~2 13
 3~5 11
 6~10 14
 11~20 9
 21~50 10
 51~100 3
 101~ 2
 しているか不明 4
 していない 20



合計 86

具体的な内容（要約）

所属機関内：基礎知識や対応方法についての講師、個別支援会議や事例検討会の助言者、研修受け入れ時の質疑応答、機関内への情報発信や相談役、保護者相談役、他機関とのコーディネーター
 他機関・団体：私立団体や公的機関における研修会講師、関係機関との事例検討や個別支援会議における助言者、高校や大学での普及啓発活動、関係諸機関へのコンサルテーション、自立支援協議会、各検討委員会他

※ 詳細につきましては、ホームページ (<http://zenkokusv.net>) に掲載しております。

本調査により、各所属機関内のみならず、他機関・団体において活躍されている方も多く、日本におけるスーパーバイズ体制の確立が高まっていることを確認することができました。本研修会で出会ったことをきっかけに結婚された方もいました。おめでとうございます。

これからも広い視野を有しながらサイエンスとアート、ハートを基軸に、専門性の向上と支援ネットワークの広がり と 絆が深めることのできる会として、会活動の発展に努めていきたいと思います。

発達障害支援スーパーバイザーの会 会長 五十嵐猛

自閉症スペクトラムのための総合保障のご案内 (2017年3月)

2017年度 保険加入をお考えの皆様へ

皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。
おかげさまでASJ保険および「自閉症スペクトラムのための総合保障」は4年目を迎える事ができました。加入者数も昨年末で約6,200名と順調に増えています。今後も皆様の声を大切に健全な運営をまいりますので、引き続きよろしくごお願い致します。

～2016年度と保障内容・掛金の変更はありません～

病気やケガでの入院、ケガでの通院、個人賠償補償がセットされています！
(年度途中で加入の場合は加入希望月の前月20日が申込締切となり、翌月の1日からの加入となります)

◇ **保障内容** 詳細はお問い合わせ下さい。パンフレット等をお送り致します。

【ASJ保険】

病気やケガにより、入院を開始した2日目から次の保険金をお支払いします。

- **入院保障金** 1会計年度30日まで
 - ・付添介護費用 1日 8,000円
 - ・差額ベッド費用 1日 5,000円
 - ・入院臨時費用 1入院 5,000円
 - ・入院諸費用 1日 1,000円
- **死亡弔慰金** 50,000円

※入院保障のみ3ヶ月の保障除外期間があります

【AIU傷害保険】

ケガでの入院、通院、初日から対象

- 本人の傷害(ケガ)の補償(入院・手術・通院)
- 死亡・後遺障害保険金 229万円～9.16万円
- 他人への損害賠償保険金(対人・対物)
1事故支払限度額 最高5,000万円まで補償

※詳細についてはパンフレットをご覧ください。



自転車事故で法律上の損害賠償責任を負った場合も対象になります！

● **年間加入掛金** (保険期間は毎年4月1日から1年間、年度毎に更新となります)

会員種別	年間掛金	内訳
● 加入プラン A 日本自閉症協会正会員(加盟団体)の構成個人会員	15,900 円	ASJ保険料 6,100円 AIU保険料 9,300円 年会費 500円
● 加入プラン B 自助会員 (上記A以外の方は申し込みにて自助会員となります)	16,400 円	ASJ保険料 6,100円 AIU保険料 9,300円 年会費 1,000円

お問い合わせ・お申込み フリーダイヤル 0120-880-819

一般社団法人 日本自閉症協会 ASJ保険事務局

〒104-0044 東京都中央区明石町6-22 ニッコンビル6F

TEL: 03-5565-2020 FAX: 03-5565-2021 E-Mail: asj-hoken@autism.or.jp

営業日: 月～金(土・日・祝・祭日除く) 10:00～16:00

* 入院保険金のご請求や届出住所・金融機関等をご変更の場合は、ASJ保険事務局までご連絡下さい。